

校内相談教室における教育相談プログラムの経過研究

－不登校生徒たちの表現したメタファーの変容－

岡口すみえ

(学校臨床心理専修)

1. 問題の所在

筆者は3年間、不登校解消支援教員として現場に関わってきた。不登校の問題を抱える生徒達と関わるなかで、「自分は駄目だ」「どうせ出来ない」という言葉が頻出し、彼らが自信を持てずにいることを感じた。そこで「自分は自分だ」という自己肯定感を高めることが必要ではないかと考えた。不登校生徒の自己肯定感を高め、自立した生き方をする人間の育成を目的とする教育相談プログラムを構成することが必要である。教育相談プログラムの効果を検証することが必要である。

2. 研究の目的及び方法

本研究においては、相談教室において、自己肯定感を高めることを目的とする教育相談プログラムを実施し、その効果を検証することを目的とした。

教育相談プログラムを実施する対象者は、勤務校(A中学校)の相談教室を利用している生徒<3年生男子1名、女子4名、2年生男子1名女子3名計9名>で、平成19年度4月から12月まで、週1回相談教室において関わった。

教育相談プログラムについては、種々の臨床心理学の理論を折衷的に用いて8つの柱を立てた。すなわち、1面接、2ワークシート、3各種ゲーム、4グループワーク、5芸術・技能等活動、6ソーシャル・スキルトレーニング、7学習支援、8その他である。

相談教室における生徒の様子・発言、教育相談プログラムの実践内容等々を毎回所定の書式に記録することとした。週一回の実践後には、専用の記録用紙を作成し、それをもとに副指導教員からスーパーバイズを受け、実践内容や留意点についてのアドバイスをもとに、次回に臨んだ。

対象生徒の経過過程における教育相談プログラムの効果を検証するために、自己肯定性尺度アンケート、投射描画法テスト・バッテリー、ワークシートの分析、観察、及び比喩法面接によりアセスメントを行った。

3. 結果

対象生徒9名についての個別の関わり記録と、21回に及んだスーパーバイズの記録を日付単位で示した。

教育相談プログラムは、1面接、2ワークシート、3各種ゲーム、4グループワーク、5芸術・技能活動、6ソーシャルスキルトレーニング、7学習支援、8その他の柱から構成し実施した。2から4においては、対象生徒それぞれの段階を考慮し、ねらいをもとに計画的に進めた。また、この8つの柱において、生徒の自己肯定感の変容を視点に入れた関わり方を意識するように心がけた。

“自分と向き合うためのワークシート”のうち、No.1 “どんな場所でどんな気持ちを感じるのかな”，No.3 “私の心のお天気日記”については、対象生徒各人ごとに記述内容をまとめた。

アセスメントについては、自己肯定性尺度アンケート、投映描画法テスト・バッテリー、ワークシートの分析、観察、及び比喻法面接について、対象生徒各人ごとに結果を示した。

4. 考察

まず対象生徒の変容について、各 9 人ごとに考察した。

ここでは、中学3年生のA子の例をあげる。A子は自分の変化を、「青からオレンジ色へ」と比喻した。自由に書いた絵 (Figure1) にもその様子が伺えた。青で描かれたお父さんだんごは、怒っている顔の表情だが、オレンジで描かれた赤ちゃんはまだ小さく生まれたばかりで微笑んでいる。ピンクのお母さんは赤ちゃんを見守っているような表情。青のイメージは暗い・あまりしゃべらない・笑わないと言い、オレンジのイメージは明るい・だんだんしゃべるようになってきた・少し笑えるようになってきた、と自分の今の状態を語っているようだった。色のイメージそのものが自分であった。投映描画法テスト・バッテリーのバウムテスト (Figure2-1,2) によると、傷つき小さくなり恐れて自分を出さずにひっそりとしていたが、自分をのびのびと表現しアピールするようになってきていることがうかがえた。嫌な気持ちになることを記入するワークシートでは、嫌な気持ちになることを記入したことによって、筆者にいろいろなつらい体験を語りだした。「初めて自分のことをわかってくれる人がいた」と、リストカットの話をはじめた。リストカットをするほどの辛さを共感しながら話を聞いてからA子の変化を感じた。辛く自分を誰にも話せないでいたA子は、これをきっかけに変わり始めた気がした。自己肯定性尺度アンケート結果を見ると、自己実現的態度や充実感 (Figure3) などは高まっており、よい結果と言ってよいだろう。最初の頃は相談教室にいてもほぼ一人で過ごしていたが、その後、3人でカードゲームをしたり絵を描いたりし、その人数が6人でも大丈夫というようになった。11月頃になり、相談教室内でやっとな他の仲間たちとグループワークなど一緒にやるようになった。12月にはグループワークにも加わり、自分の事を他の仲間たちに話すようになっていった。A子にとって教育相談プログラムの何が効果があり、そのプログラムはどう機能したのだろうか。ワークシート (Figure4) をきっかけに自分の辛い体験を語りだしたA子は、誰かに話しかけてもらいたい、誰かに辛さを分ってもらいたいという気持ちを無意識に持っていたのではないだろうか。あの時ワークシートをやってみないかという誘いを筆者がしなかったなら、「クラスの奴ら」という内に持っていた怒りを聞き取ることは出来なかったであろう。辛い体験の話の聴いた後にはカードゲームで関係を作り、少しずつ相談教室の



Figure1 自由画

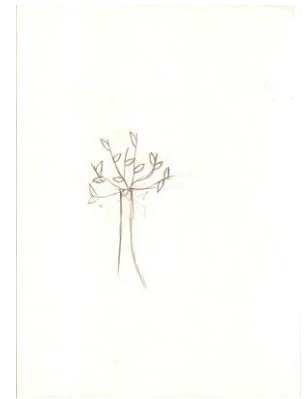


Figure2-1 バウムテスト 9/21

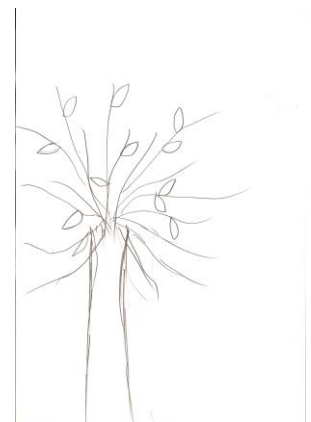


Figure2-2 バウムテスト 11/30

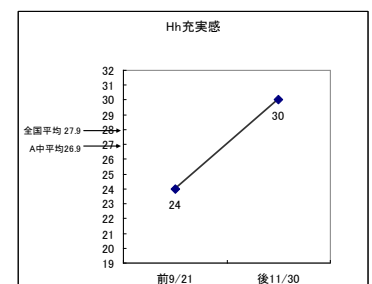


Figure3 自己肯定性アンケート結果

仲間と遊べるようになってきた。ゲームの持つ重要な役割を感じた。

つぎに教育相談プログラムとアセスメントについて考察した。不登校レベルの個人差が大きく、学年も違う小集団での教育相談プログラムの実施は困難なことも多かった。しかし、相談教室で大部分を過ごす生徒たちは、教育相談プログラムがあることにより、生活にめりはりがついたと言える。“折衷主義”の考え方であらゆる方法を取り入れたことは、学校が楽しいと感じ、登校する意義も見出すようになってきた。また人と関わるスキルや、自己表現することも自ずと身につけていったのではないかと思われた。個々のプログラムはそれぞれ別個のものであるが、相談教室においては、それらがつながっていた。本研究のためのA中における実践においては、「面接」の意義が大きかった。面接において生徒と支援者の関係が成立し、生徒が支援者に対して話すようになった。個々のプログラムは、それぞれの持つ本来の目的とは別に、生徒と支援者、あるいは生徒同士の関係作りの手段として役立ったという側面があった。

最後に教育相談プログラムを実施する場である相談教室とそこにおける教員の役割について考察する。相談教室は、普通教室に居場所を失った生徒たちにとっては避難所である。不登校生徒にとっては、学校の中に避難所としての相談教室が存在することが、普通教室に復帰する足掛かりとなる。しかし一方で、相談教室が学校の中での特別な空間であるがゆえに、生徒の認知にネガティブな作用をも及ぼしている。自己肯定性尺度アンケートにおいて、被評価意識が高まってしまった生徒が3人いた。相談教室という守られた空間内で人の目を気にせず生活できることに充実感を感じる一方で、相談教室から一歩出ると自分がどう観られているかという友達の視線やうわさ話などが気になるのであろう。普通教室において自己肯定感を得られない生徒にとって、相談教室は避難所であるが、避難所としての相談教室において自己肯定感を回復する手掛かりをつかんだ生徒たちが、真に自己肯定感を確立するためには、原則として普通教室に復帰する必要がある。

5. 課題

「教育相談プログラム」を課題として掲げながら、相談教室において教育相談プログラムを構成することの意義について自覚が低かった。たとえばワークシートについて、筆者はワークシートを熱心に利用したつもりであったが、その利用の方法を結果から振り返ってみると、生徒と支援者との関係作りの媒介として利用し、あるいはワークシートに表わされた認知を生徒のアセスメントに用いるというものであった。本当のねらいは、筆者の実践のさらに先にあったのだと思えた。そのことは、ワークシートに関するスーパーバイズをいただいたことで気づいた。

プログラム実施者は、生徒の認知に対して介入し、変容を促す手段としてワークシートを活用する方法を体得していくことが必須である。しかし学校現場の実際においては、ワークシート1つをとっても、単に認知行動療法のツールであるにとどまらず、生徒と教員の関係という、すべての教育相談プログラムの前提を作るための手段でもあり、また生徒のアセスメントのためにも活用しうるものである。そういうプログラムの多面性に目を向けていくことも今後の課題であると思われる。

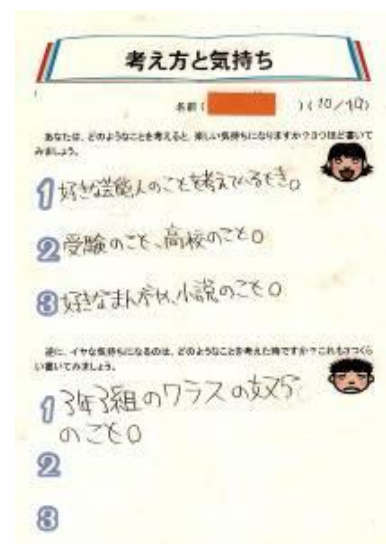


Figure4 考え方と気持ち